

対象者の絶頂を吸い上げるリングを開発したそうなので、6時間の寸止めに耐えてから一気にイけと博士から脅されています

体験版

攻め：志村

受け：溝口

要素：拘束、射精管理、玩具、ドライオーガズム、連続絶頂、結腸責め、乳首責め

「またしても生み出してしまった！」

「至急、私の研究スペースに来てもらいたい」

今月の売上報告資料をまとめている最中、パソコン画面に通知が現れた。開いてみると、大変不穏なメッセージが2通。送り主は同じ相手。2度あることは3度ある、そんなデジャヴを感じる流れに嫌な予感しかしない。

しかし、上司からの呼び出しだ。緊急性があるなら、無視をするわけにはいかない。重い腰を上げて、博士の研究室へと向かう。歩いて2分もかからない道のりを経てドアを開けると、目をギラギラに血走らせている志村博士が僕に近づいてきた。

「お呼びですか、志村博士」

「聞いてくれ溝口君！先日、まさに革命を起こすかのような発明をしてしまった！」

「なるほどですね。じゃあ僕、宣伝用に国旗買ってきますんで。どうぞ群衆を導いてもらって」

「いやいや、群衆を導くだなんて、そんなそんな」

「冗談です。あと博士は人の先頭に立つのは止めた方がよろしいタイプかと」

「んぬう！」

博士は意気揚々と僕に近づいて、気持ちが荒ぶったままに手を握ってきた。それを静めるために冷や水をぶっかけてみると、かっと怒りの炎が吹きあがる。大きく乱高下する感情の起伏は、何度見ても面白いと思う。

「初めてジョークを聞いたかと思ったら！上げて落とすのか君は！とにかく聞いて！今回の発明は、あの棒より、あのバイブより更に高度な技術が組み込まれている過去最高作なの！」

「そういう方向性で最高を生み出すのではなく、もっと世のためになる発明をしてほしいんですが。基本的には優秀なんですから」

しかしながら彼が告げた発明品が、過去の変態的発明品を超えると説明され、僕はがっくりと肩を落とす。どうやら彼が仕上げてきた逸品は、またしても卑猥なことに使う物のようだ。どうして聡明な頭をそちらに動かしてしまうんだと、ため息を吐く。ただし、博士は自分で天才だと言ってしまう痛い人で、こんな発明品ばかりが世間でもてはやされてはいるが、言葉通り天才なのは間違いない。そもそも、この研究所で働きたいと志願したのは僕自身だ。ここで雇ってくれと、勢いのままに直談判した。志村博士との最初の接点は、たまたま自分の論文を書くにあたり、彼の研究論文を目にしたことだった。初めて見た論文内容は、まさに衝撃の一言につきる。大学生だったあの頃の僕は、こんなに素晴らしい人が日本にいることに、感動すら覚えたほどだ。

「すごい…。これを書いた人が、まだ日本にいるなんて」

研究員として食べていくには、日本は比較的安価に雇われてしまうことが多い。優秀な人ほど、海外に移住して現地の研究者になるケースがほとんどだ。だから博士が日本にいるうちにと、僕は彼の研究室の場所に自ら赴き、共同研究がしたいから働かせてほしいと無理やりな交渉をした。今思うと相当失礼だし、断られても当然のことをしたと思う。

けれど志村博士は、意味の分からない若造の僕を雇用し、当時は今よりも手狭だった研究所に、僕専用のスペースを設けてくれた。自分より年下で生意気な僕に、ある程度裁量を持たせて仕事を割り振る博士は、多少変人ではあるけれど寛容な人でもあると思う。

そんな彼の力になるべく、僕が最初に着手したのは金銭面を潤沢にすることだった。元々センスのある発明品は多く、うまく売り出せばすると販売数が伸びていくのは、博士が世間に認められていくようで嬉しくもあった。だがしかし、ある発明を境に事態は一変する。

資金繰りの悩みを解消した博士は、メガヒットと言える発明品を生み出した。それが「つついた場所の感度を10倍にする棒」だ。開発が追いつかないほどの注文が来て、僕はこんなものがなぜ売れるんだと嘆きながらも、その忙しさにはやりがいを感じた。しかし次の「対象者の性器と感覚がリンクするバイブ」を開発したときに、意図的にモニターにされ、しかも度を超える実験に付き合わされたのは根に持っている。そして今日、明らかに同じ流れで呼び出されているのが、あまりにも不安なのだ。

試す気なんじゃないのか。僕で、その過去最高作とやらを。試してもいいが、下品さが度を越した発明品だった場合、断固として拒否したい。

「ちなみにですが、僕が新しい発明品モニターをする場合、先に製品の詳細を聞いてから判断させていただきます」

「なるほど！助手である君も興味津々ということだね！？研究熱心で感心だ！」

しかしながら、この博士の嬉しそうな表情である。自分が褒められて悪い気はしないし、発明品に興味がないとは言わない。ただ、乗り気だと思われているのは癪である。なんでそんなにポジティブなんだと問いたいが、彼の思考回路が解き明かせるわけもないので、さっさと話を進めることにした。

「若干語弊がありますが、概ねそんなところですよ。ちなみに今回はどんな発明品なんです？」

「ん～、言葉で説明するのは難しいというか、割と実験には時間がかかりそうな感じで、だから溝口君にやってほしいなっていう」

「抽象的な表現ですと分かりにくいので、端的に発明品の特徴を教えてくださいませんか」

「え～っと…。まあ簡単に言うと、装着している間は対象者の射精を吸い上げるコックリングを作ったんだよね！だから溝口君には、どのくらいの時間このリングが射精管理できるかを試してもらいた——、って、こらこらこらっ！溝口君！？どこに行こうというのかね！！」

「博士のいない土地です」

「待って、待って！落ち着いて聞いて！新作の実験だよ！？興味あったんじゃないの！？」

そうして、蓋を開けてみればこれだ。なんだって？射精を吸い上げるリング？どんな仕組みだ、それは。確かに装置そのものに興味はある。ただ、あまりにも摩訶不思議な発明品のモニターをしたいかと問われれば、絶対に嫌の一言に尽きる。けれど博士に背を向けてドアに向かおうとすると、僕の腰に博士がしがみついてきた。あまりの必死さに少し引いてしまう。

「やだ！行かないで！協力して！」

「嫌です」

「特別手当あげるから！」

「金で釣るなら一般公募をかけてください」

「お願い！半日だけ！半日だけでいいから！」

「先っぽだけみたいな言い方が嫌なんですが」

「溝口君のえっち！」

「...セクハラに耐えきれなくなったので、今すぐ退職代行に電話しますね」

「わー！わー！やだやだやだ！実験したい！溝口君で試したいんだもん！溝口君じゃなきゃ嫌なんだもん！」

しまいには大人げなく癩癩をおこす博士を見てげんなりする。なんで僕が悪者のような空気なんだ。普通に嫌に決まっている。僕がこれまでの2回、博士にされたことを考えれば拒否一択だと思うんだが。とはいえ、さすがに上司を蹴り飛ばすわけにもいかない。冷たい目で見下ろして、彼が諦めてくれるのを待つ。けれど彼は、諦めの悪い男だった。だから開発途中で壁に当たっても乗り越えるのだけれど、そのネバーギブアップ精神をここで活かさなくてもいいのと思う。

「よし、分かった！じゃあこうしよう！私の半日も溝口君にあげようじゃないか」

「と、言いますと？」

「君が実験に協力してくれた時間と同じだけ、私も君に協力しよう！内容はなんでもいいよ！命に関わらないものであれば！休日に買い物に行くとき私が運転手になってもいいし、君の研究の手伝いをしたっていい」

ごねる博士は、実験協力後の具体的な報酬を示してきた。今まではほとんど僕だけが実害を受けることによって成り立ってきたが、今回の実験に関してはボランティアの協力ではないということだ。

いずれにせよ、僕の体と時間は犠牲になる。とはいえ、博士の半日が手に入るのは魅力的だ。こう見えて意外と博士は勉強家で、知識が深い。そんな彼と、最新研究について語り合うことも可能なら。

「……、僕の興味がある人の、最新の研究に対する質問もできたりしますか」

「もちろん！なんでもお答えしましょう！」

「博士が気になっている方の、論文リストなども拝見したいです」

「それもゼーんぶ送っちゃう！」

むん、と僕に向かって胸を張る博士の返答に対し、考えること数秒。ドアに向けていたつま先を、今度は博士の方に向ける。

「では、最大で半日。実験に協力します」

「溝口君なら、必ずそう言ってくれると信じてたよ！いやぁ、持つべきものは優秀な助手だよね！そしたら早速、実験スペースに移動しようか」

僕が実験への協力を了承すると、博士は先ほどまでの醜態を吹き飛ばす、晴れやかな笑顔になった。その顔に、がっくりと肩が落ちるのはなぜだろう。

ああ、また言いくるめられてしまった。でも博士の半日は貴重だし、魅力的だ。

だったら自分が犠牲になるのは嫌でも、やるしかあるまい。これは仕事だ。善意

の協力だ。でも、なぜだろう。やはり前を歩く博士は、群衆を導く女神ではなく、地獄に導く悪魔にしか見えない。そんな悪魔化した彼が扉を開く実験スペースで、僕は今日も生贄として我が身を捧げることになる。

これまでと違い、騙し打ちのように卑猥な発明品の実験が始まるわけではないので、心構えができるのはいい。そう思っていたが、真顔の博士から下に着ている服を全部脱いでほしいと言われた時、いいことばかりではないとすぐに後悔した。性器に取り付ける物なのだから、当然衣類がない方がいいのだが、自ら身体を差し出すのは以前よりも羞恥が強い。

それでも実験の協力を申し出ている手前、嫌とは言えない。手早く服を脱ぎつつ、気を紛らわせるために、僕は博士に今日の実験の流れを聞いた。

「服を脱ぐのは構いませんが。そもそも本日は、こういった流れで実験を進めていくおつもりですか」

「うーんと、まずはこのリングの効果が本物かどうかを確かめる必要があるから、とりあえず溝口君を勃起させるでしょ？そこにリングを装着して、射精するには十分な刺激を与えて動作確認。で、問題なかったら次は効果がどの程度継続するかの実験をしていくつもり」

「...なるほど。効果時間の計測は、どの程度をお考えでしょうか」

「大体6時間くらい続けば十分かな、と思ってるんだよね。いや、でもどう思う？6時間じゃ短い？やっぱり10時間ぐらいにした方がいいかな！？」

「いえ…。6時間で十分かと」

事もなげにスラスラと話す博士は、自分の言っている実験の恐ろしさを微塵も感じていないのだろうか。というかこの言い方だと、僕は6時間ほど強制的にイカされまくる、というAVも真っ青な展開になるのではないのか。けれど不用意な発言をしたら、やっぱり10時間やろうと言われかねないので、むやみに博士の研究心を刺激しないよう注意した。

僕としては、射精の我慢なんて1時間もできたら十分なのではと思うが、一般論を出して耳を傾ける人ではない。だからこそその天才だ。そして天才だからこそ、気の遣い方が普通と少々ズレている。

「でもね、今回はリングそのものが装着者に刺激を与えるわけじゃないでしょ？実験をするためには、常に射精感をもってもらわないといけないからさ。色々考えて、こちらも用意してきました」

「それは何です？」

「こちらはビルドアップいぼいぼコンドーム（改）です」

この実験においては、リングを付けたまま、射精を常に吸い上げられる状態を維持するのが必須条件だ。そのために博士は、わざわざ僕に刺激を与える何かを別で用意したらしい。そんなものを発明する暇があるなら、もっと別のまっとうな製品を開発してほしいのだが、相手は博士だ。作れるのなら既に完成品が並んでいるだろう。僕は更なる責め苦があることを察しながらも、謎のコンドームについて問う。

「そちらのコンドームも、ただの避妊具というわけではないのですね？」

「そう。元はいぼをつけただけのコンドームを作っていた時に閃いたんだけど。人によって良い場所って違うし、付ける人によってもイボの位置が変わるでしょ？となると、同一規格だと万人にとって完璧な気持ちよさを提供できないと思ったんだよね」

「それは確かにそうでしょうけれど。一人一人に合わせて作ることなど不可能では？しかもその発想でいくと、コンドームの場合はペア同士で形を変える必要があります」

「その通り。通常は不可能に近い。でも私は、その不可能を可能にした！なんとこのコンドームは、自動で入れた相手の良い場所を特定して、その人に合う形に成長するように設計してみました！だから誰が付けても、誰に入れても、超ピンポイントに気持ちいい所を擦ってくれる、世界でただ一つのイボ付きコンドームになるのです！」

そして博士は、効果音が聞こえてきそうなくらい高らかに製品の説明をしてから、自信満々の顔でコンドームを見せつけてきた。一体どんな仕組みでそうなるのかは気になるが、今日考えるべきはあのゴム製品の構造ではない。

下半身が丸裸の僕。本来実験に使う予定のリング。そして気になるのは、先ほどから視界にチラつく、座る部分に下品な形状の棒が付いた椅子。その棒に、博士がコンドームを装着し始めた。今から起こることが分かっても、現実を受け入れられない僕は、額を手で押さえて天を仰いだ。

「はい、というわけでこちらのコンドームを椅子に固定しておいたバイブに付けておくので、溝口君はこれに座ってください」

「嫌です」

「嫌でも座ってください」

「なんでそんなものを作ってしまったんですか！ただ射精を促すだけなら、僕が精力剤か何かを飲めばいい話では！？」

「いいでしょ！？同じ時間で、2つの発明品が同時に実験できるんだよ！？だからはい、早くここに乗って」

「明らかに自分が苦しむことが分かっている状況で、僕が素直に頷くとでも？」

「しょうがないでしょ、この実験には必要なことなんだから。ほら、ローションならたっぷり塗っておくよ？これで痛くないから！」

「そういう話をしているわけではないんですよ」

「どうして！？溝口君だって気持ちいいのになんでなの！？いったい何が嫌だっていうの！？私は君のためを思って準備したのに！」

「アナタって人は...！」

ピーピーと喚く博士を見て、こめかみにビキビキと血管が浮かぶ。この人、僕相手なら何をしても問題ないと思っている節があるんじゃないか。僕だって人間だぞ。しかも別に、エロいことが好きなわけでもない。なのになんで好きこのんで、こんな特殊プレイまがいのことをしなければいけないんだ。彼が尊敬する上司でなければぶん殴っている。

座れと促された椅子は、ちょうどお尻の辺りにバイブがある。やはり座るとなれば、あれに乗るしかないのだろう。嫌だ、とても嫌だ。でも嫌と言っても乗せら

れそうだし、嫌がり過ぎたら別プランに変更されて、更に卑猥な発明品が出てくるかもしれない。割り切れ、これは実験だ。半日耐えれば、博士も半日僕に付き合ってくれる。ええい、どうにでもなれと、僕は椅子に近づいて、意を決してバイブを自分の中に入れていった。

「んんぐ...っ！っ、う、こ、れ、普通に、大きくないですか...！」

「もう、そんな事言われたら照れる」

「褒めてませんが...！」

「ぐう...！今日は溝口君に上げて落とされる日か...。まあいいや。じゃあ後でコックリングを付けるけど、自分で取れないように、今のうちに手はひじ掛けに固定しておくね」

「っ！？で、でも今はまだ、リングはついていませんし」

「いや、あんまり溝口君に動かれても困るんだよね。このコンドームはまだ改良途中だから、きちんと形が整うまで30分かかっちゃうのが難点で。その間じっとしててほしいというか」

「30分！？その間コレをいれて、動かずにじっとしていろということですか！？」

「うん、そうだけど？」

しれっととんでもないことを言う博士に、またしても僕は脳の血管が千切れる音を聞いた。そうだけど、ではない。なぜそういう大事な部分を伏せておくんだ。あと、平然と僕の手を拘束するのもやめてほしい。しかも手だけ拘束するかと思ったら、コンドームが馴染むまでは足も固定するねと、勝手に太ももとふくら

はぎにベルトが巻かれた。前回も使用した産婦人科医の検診用椅子が、こんな魔改造をされているとは。医療関係者は夢にも思うまい。

しかしながら、博士には博士の善悪があり、一般的な常識が通じない節がある。だから彼は腕時計を見ると、よし、と意気込んで、入ったときから部屋に散乱していた資料をまとめだした。

「よし！じゃあ僕ちょっと席を外すから、溝口君も30分ほどゆっくりしておいで。この時間は休憩みたいなものだから」

「この状態でリラックス出来るとでも？」

「まあまあ。そうカリカリしないでよ。まだリングも付けてないんだから。寝てもいいし、好きにしちゃって！じゃ、また後でね～」

「ちょっ、博士！？本当にこのまま放置する気ですか！？」

そして良い意味で実験にフラット、悪い意味で人でなしの彼は、パタパタと忙しく部屋を出ていった。あの様子だと、本気で30分後に来るに違いない。幸い部屋に時計があるので時間経過は分かるが、じゃあゆっくり寝るかと思えるほど図太くもない。ふざけるんじゃない、いや、博士はいつも真剣か、真面目にこれやるあたりが狂っているのかと、納得と諦めの両方を感じてため息をつく。

ただし、動けない分違和感はあるけど、中からの刺激は我慢できるものだった。振動もなく、動きもないバイブは、僕が散々いいようにされてきた前回までよりはマシに思える。嫌ではあるが、実験と思えば耐えられそうだ。

そうして、どうにか呼吸を整えて20分。あと残り10分と気合を入れてから、更に5分。そろそろ博士も戻ってくるだろうかと思っている頃、異変があった。筒状の平面に近い形だったバイブが、急にコリコリとした突起を作り出したのだ。

「っく、ん、んん!？」

同じように呼吸を繰り返していても、中の小さなイボや、デコボコとした波型に変わった何かが、僕の内部を静かに刺激する。おそらくこれが、博士の言っていたコンドームの完成形だ。時間が経って、僕の良い場所を的確に刺激する形に変化したのだろう。

ただ、僕はこの発明品を軽く考えていた。それを今になって思い知る。どうあがいても嫌な場所を責めてくる突起は、僕がじっとしていたせいで、かなりの確に弱点を捉えていた。しかも手も足も動かせないから、同じ場所に当たりっぱなしだ。

「ふ、う、うっ、ッ、あ、い、いやだっ...! なっ、これ、ん、う、うううっ! ずっと、い、嫌なとこ、当たって、ん、んんっ! っく、あ、そこ、は、だめ、ダメなのに...!」

出来る範囲で身じろぎすると、逆に良い場所に突起が擦れる。しかも良くないことに、市販品ならば規定のサイズで統一されるだろうに、僕専用に進化したコンドームはイボの大きさや固さも違っているようだ。前立腺を擦る突起は、大きなでっぱりを形成し、そこに更に小さなイボが付いている。ぐりぐりと押されてか

ら、細かな刺激がやってくるのは拷問に近い。加えて、入口をまんべんなく刺激するイボも360度びっしりついている。だめだ、これはダメだと腰を浮かせたいのに、太ももを拘束されていて動けない。せめて息を整えて刺激を和らげたいと努力しても、指では届かない奥にある場所が、あともう少しで良い場所をこじ開けそうになっている。入口をつぶ、つぶ、と伸びた突起に突かれているせいで、気を抜いたら入ってしまいそうで怖い。

「はあ、あ、あう、っ、んん、やだ、博士、早く、早く...！」

抜いてはもらえずとも、せめて拘束くらいは緩めてほしかった。どのみち本日の実験のメインであるリングを付けてもらわなければ、実験は先に進まない。今はまだ準備段階で、感じていたって仕方がないのだから。

けれども時計を見ると、予定の30分を既に過ぎていた。なんだと、なぜ時間を過ぎても博士が現れないんだと、入口に目をやる。しかし扉が開くことはない。それから更に5分が経過しても、10分経過しても博士が来ない頃には、僕の内部はすっかりコンドームの刺激で溶かされていた。

「あふ、う、ううう、ん、んっ...！いや、だ、もうやだ、助け、て、こんなの、っ、ッッ！！」

誰もいない空間で一人悶えているのも、僕の精神を抉る。これは実験なのに。なんなら、下準備でもあるのに。無機物に犯されて、先走りを零すほど感じているなんて。

「ひう、うううっ！はか、せ、志村博士え...っ！早く、早く、う、あ、ああ、博士、博士ええっ！」

ガク、ガク、と身体が不規則に揺れだした。一緒に動く熱から、股の間に先走りがこぼれていく。達するほどの刺激は与えられないのに、気持ちよさは増えていく生殺しの状態。きっかけさえあれば、いつでもイケるくらいには高められた。もういい。準備は十分だと、必死に首を振る。それでも、扉から博士がこの部屋に入ってくることはない。

「はあっ！あああっ！も、もお無理、無理無理無理...ッ！助け、てえっ！博士っ！あ、んっ、んんんううっ！ううううやだやだやだ...！早く来て、助けて、助け...、て...！」

みっともないが、ボロボロと涙が出てきた。自分ではどうにもできない状況に、先に精神がやられていた。苦しい。気持ちいい。気持ちよくて惨めだ。早く、早く来てくれと博士の到着を待つのに、時間が経過するばかり。時が経つほどに中から送られる快感も増えるから、体力も削られていく。

「ふう、ふ、う、ううううう...っ！！んんんぐ、う、あ、は、は、はっ、ひ...！んああ、あ、は、かせ、志村、博士っ...！ああ、も、もお僕、っ、〜〜〜っ...！」

拘束されていなければ暴れていたかもしれない。それくらいの快感が、じっくりと僕の中で膨らんでいる。まるで狭い箱の中に入っているのに、自分の内側から風船が膨らんでいるみたいだった。時間とともに大きくなる風船のせいで、限られたスペースを圧迫される僕は、息すら苦しくなっていく。でもゴム製のそれは割れることなく、ただただ僕を悪戯に弄ぶ。

「んう、あ、あゝ あああっ！だめ、だめ、そこもう、ううう、んんんっ！
はあ、嫌、なのに、良い場所ばかり...！んんんぐっ！ああっ、っひ、うう
うっ！うああ、ああ、あああああっ！！」

チラリと時計を見れば、最初に予定していた時間から大幅に過ぎていることだけは確認できた。でも、何時になったら僕の上司が現れるかは分からないままだ。助けてくれ、早く来てくれと願うしかない僕は、椅子の上で虚しく身を振らせるしかなかった。

「ごめんごめん～！ちょっと遅くなっ、た...、って...。すごいことになってるねえ、溝口君」

「っ、っっ...！」

予定していたはずの時間から、大幅な遅刻をして現れた相手を睨む。僕があれから1時間も苦しんだというのに、簡易的な謝罪の言葉を2個並べて、ヘラヘラして

いられるとはどういう神経なんだ。ちょっと遅いではすまない。だいぶ遅い。とても遅い。遅すぎるぐらいだ。

だが、本気で悪気はないらしい彼は、準備万端だね、と笑顔で頭を撫でてきた。なんでご満悦なのかが理解できないが、実験の下準備が順調に進んだことを喜ばしく思っているのかもしれない。そしてまだ今は、ただの準備なのだと思うほど絶望が深くなる。本番はここからなのに、早くも心はめげている。めげているから、博士がウキウキと手に取ったリングを見て、まともな言葉が出ない口からうめき声が出た。

「これだけ先走りが出てるのに、よく射精せずに待ってたね。偉い偉い、さすがは溝口君だ！じゃあ準備バッチリなここにリングを付けていくからね」

「うう...！」

フリーサイズと説明を受けたそのリングは、いちいちサイズ展開をするわずらわしさを減らすべく、あえてゆるく作られているらしい。それだと射精管理ができない代物になってしまうが、輪を根元付近まで通した後、リングに付いているスイッチを押すと、勝手にほどよく締まる性能を持っている。どうしてそういう技術をコックリングに活かしてしまうのかと嘆くばかりだが、博士はやはりアイデアも、創作能力もかなり高い。

説明通り、なんらかの操作が施された後、ゆるく付いていたリングはみるみるうちにサイズを縮小し、ぴったりと僕を戒める大きさになった。けれど、締め付けて一滴も出せないほどきつくもない。

「一応これで、溝口君のサイズになったと思うんだけど、どう？」

「そう、ですね…。最初の緩い時に比べるとフィット感がありますが、完全に射精を遮断できるほどのきつさはないように感じます。本来は、もっと輪が縮小した方がいいのでしょうか？」

「いや！それならむしろ、私の想定通りだと思う！とはいえ、無事に動くかどうかは試さないかね。よし、じゃあこの状態で一回射精しよう」

「えっ、い、今ですか！？」

「当たり前でしょ？なんのために準備したと思ってるの。まあここまで勃起したら、ちょっと扱けばすぐかな」

「んあああうっ！！？」

そして僕が付け心地に対してコメントすると、次は間髪入れずに動作の確認が行われた。なんのためらいもなく自身を扱かれて、ガクンと身体が跳ねる。けれど拘束されたままなので、椅子を大きく揺らす程度で済んだ。

だが、コンドームの形が出来上がったのなら、せめて足の拘束は解いてもらってもいいのではないか。どうしてベルトを付けられたままなんだ。もうこれは不要ではないでしょうかと、足をどうにか揺らしてアピールしたのに、博士は扱くのに夢中で全く気づいてくれない。相変わらず研究以外のことでは気が回らない人だと、心の中で舌打ちをする。

ただ、悪態をついても気持ちがいいことに変わりはない。元々長時間焦らされていた身体は、直接的な刺激を受けて一気に高まった。自分でも驚くほど、すぐに射精に向かっていく。ガク、ガク、と腰が揺れて、放出に向けて勝手に臀部が宙に浮いた。

「うあああっ！！あ、あ、まっ、博士、も、もう僕、イキそう、で...！」

「うんうん、いいよ。そのまま出してみて」

「ッ！！ふ、っぐ、う、〜〜〜〜.....っ！っ、あ、う.....！？」

実験は実験なので、射精しそうなことは事前に伝えた。そして博士の許可ももらったので、僕は諦めてさっさと達してしまおうと、腹に力を入れる。けれども本来あるべき瞬間は、僕がイッたと思った後にも現れなかった。

精液が出てこない。では、上手くイケなかったのかと言われると、少し違う。絶頂の一步手前くらいの感覚はあった。でもそれが自分から放出される前に、すっと何かに吸い取られたように感じた。同時に、せり上がった精液が吸収されたようにも思う。だから、僕の腹や太もも、椅子に飛び散っているはずの白濁液が飛び出してきていない。

まさに、未知なる感覚だった。信じがたいものを見る目で自分の熱を見る。しかも恐ろしいのは、イッたのにイッていないと思い込んでいるのか、性器は萎えないうままだ。一体、何が起こったというんだ。まるで本当に、僕の絶頂がリングに吸い上げられたようだと、根元に付いている器具を見た。

「な...、なに、今、何が...？」

「その様子だと、実験は成功かな？それともまだイッてない？」

「いえ、僕自身は射精に向かっていましたし、イケたと自分で思ったんですが...。実際には、出ていません。いや、出したはずなのに、と言った方が正しいかもしれません」

「なるほど！じゃあリングはきちんと動いているね！まずは1回分、溝口君の絶頂が吸い取られたんじゃないかな」

「まさか…。本当に、そんなことが」

よしよしと、一人納得してタブレットに何事かを記入していく博士を見ながらも、僕はまだ半信半疑だった。自分の身に起こったことなのに、未だ信じられない。

本当にこのリングに、僕の絶頂が吸収されたのだろうか。実はイッていなくて、そう感ただけかもしれない。実際根元がきついのは間違いないし、ただ精液を出さずにイッただけなのではと、まじまじと自身を見つめてしまう。

けれど、僕が信じがたいと一人呟けば、博士はなぜか目を輝かせてきた。いつもであれば、彼の研究意欲できらめく目を見ると、僕もやる気を刺激されたりするのだが、今は違う。その企みの全てが、自分の身に返ってくるのだから。

「なっ、なんですかその目は。何か企んでるんじゃないでしょうね」

「いやいや！確かに溝口君なら、そうか、これに吸収されたんだ！すご～い！志村博士ってやっぱり天才！ってすぐには納得いかないかと思ってね！だって君、今まだ信じられてないでしょ？もしかして自分がイッてないだけなんじゃないか、って思ってるんでしょ？」

「指摘したい点が所々ありますが…。まあ、概ねそうですね」

「気になるなら、君に一回戻してみようかなと思ってね。さっきイッてたなら、きちんと溝口君に絶頂が返っていくはずだから」

「返すって、そんなのどうするんです？」

「え？単にこれを外すだけ」

「さすがにいくら博士が稀代の発明家と言えども…。にわかには信じがた、あ
————、あゝ……ッッッ！！？」

だが博士は、疑いをもつ僕を否定しなかった。それどころか、キラキラとした目でとんでもないことを言ってのける。とはいえ、絶頂を返すことなど不可能だと思う。そもそも、吸い上げられたのも嘘ではないかと思っているくらいだ。失礼ではあるが、妄言の一種としか考えられない。

けれど、僕が目を細めて彼を見ると、博士はせっかく下準備をしてから取り付けたリングのスイッチを押して、ぱっと戒めを解いた。すると次の瞬間、ぐぐっと自分の根元から精液がせり上がってくる感覚がおとずれる。そして冷静になったはずの脳に、バリバリと電気を流されたかのような快感が走った。なんだこれ、今何がと思うよりも早く全身が突っ張る。少し前に途中で終わった射精への道のりを、いきなり結合させられた。そのまま自分の意志とは無関係に、絶頂へと駆けあがっていく。

「んんんううっ！！！？あ、っ、ううううっ！！！」

どぶっ、どぶっと、割と多めの精液が腹に飛び散った。身構えられずにイッたせいか、どっと疲れが押し寄せる。肩で息をしながら、今起こった出来事をどうにか理解しようと目を凝らした。その目線の先で、もう一度僕の熱の根元でリングが締められる。

「ッ、な...！？な、にが、今、なに、が...！？」

「だから、君に絶頂を返したんだってば。貴重な一回分を無駄にしてしまった気もするけど、正常に動いてるかどうか、確認はしないといけなかったしね。無駄打ち一発で済んで良かったと思っておこうかな。そしたら確認作業も終わったし、本格的な実験を進め——」

「は、博士！すいません、あの、ひとつ確認しておきたいことがあるのですが！」

「ん？何？」

リングが締まった瞬間、まだ残っていた余韻すら吸い上げられていく感覚に身震いした。同時に、僕はとても大事なことを見落としていたのではないかと考えて、内心かなり焦っている。

博士は天才だ。だからいつも、僕のような凡人の想像をはるかに超えてくる。良い意味でも、悪い意味でもだ。それ故に、もしもこの発明品が、僕が最初に想像したものよりもっともっと凶悪な仕組みを持っているとしたら。話はかなり変わってくる。

「僕は博士から発明品の説明をお聞きした際、これは対象者の絶頂を吸い上げて、絶頂を打ち消すリングだと思ったのですが！それは正しい理解ではなく、本当は『対象者の絶頂を吸い上げて、外した瞬間に装着時の絶頂を一気に放出するリング』なのではないでしょうか」

後半は、言いたくなくて勝手に声が震えた。できれば、違っていてくれと願う気持ちはかなり強い。

僕は最初に今回の発明品の話を聞いた時、リングを装着している間は、射精が出来ない状態を強いられるだけだと思っていた。それはそれで辛い、ある意味では快感と寸止めに耐えればいいだけとも言える。だけれど、耐えた分がしっかりと残っていて、かつ返ってくるのだとしたら。僕はこれから受ける寸止めの分を、どこかのタイミングで一気に受けなければいけないのではないのか。実験が長時間にわたるなら、1回や2回分の絶頂で終わらないことは確かだ。それを僕は、一瞬で浴びることになるかもしれない。

数時間に及ぶ絶頂が止められるのも恐ろしいが、人体はその快感に耐えられるようにできているのだろうか。もしも耐えられる人がいたとしても、僕は一般人であって、鍛えられた精神はもっていない。いや、そんなことは博士にだって分かっている。そう、何と言っても彼は天才で、研究熱心で、だからこそ危険と判断したら、実験そのものを中止する程度の理性は持っているはずだ。

そうであれ。そうであってくれと、半ばすがるように彼を見る。そんな視線を、彼はまるごと包み込むような笑顔を見せた。

「わ～！正解正解！そう、そうなんだよね！いやあ、やっぱり持つべきものは優秀で協力的な助手だよね！そうじゃなきゃ、このリングの実験に快く6時間も協力してくれるわけないもんね！」

だが彼は、現代に生まれた類まれなる頭脳をもつ、とことんマッドなサイエンティストだった。到底僕の理解が追いつく人ではない。

馬鹿な。6時間分の寸止めを耐えるだけなら、まだなんとかなった。でも、いった分が返ってくるなら大問題だ。しかもこの人のことだ。後々が辛くなるから、何度かイッたら静かに待っていてもいい、なんて優しさは持ち合わせていまい。きっとイカせて、イカせて、イカせまくって、その後にリングを取るに決まっている。

とんでもない実験に巻き込まれてしまったのを、今になって気が付いた。ふざけるな、こんなことなら博士の半日を確保できても協力しなかったと、ベルトの付いた手足が千切れるほどに暴れる。けれども見た目以上に丈夫な拘束具は、僕の抵抗をものともしない。

「快く了承なんかしてませんが！説明が不十分じゃないですか！？僕だってもっと早くに知っていれば協力しませんでしたよ！アナタって人は、また騙し打ちみたいなことをして！許しませんよ、今回こそは！！」

「はいはい、もう縛って動けなくしたし、1時間焦らしたから溝口君が拒否するのは無理で〜す。諦めてくださ〜い」

「さっき遅れたのもわざとなんですか！？いえ、わざとなんですね、この人でなし！」

「そうやって暴れて、自分で体力削って大丈夫？これから死ぬほど気持ちいい時間が6時間も続くのに」

「ふぁっ！？あああああぁっ！！？」

にまにまと笑っている性悪上司は、僕の焦りっぷりを楽しんでいる節すらある。最低だ。自分が実験対象ではないから高みの見物なのか。もっと助手を思いやる

べきではないのかと思い切り睨みつけたら、瘤に障ったのか、僕に入っていたバイブが振動を始めた。今まで表面のゴムの形は変わっても、動きの無かった内部の棒が、今度は的確に良い場所を震わせてくる。

「んんんんぎっ！！まっ、あ、これは、ああ、んんうううううっ！！まっ、いいとこ、に、いいとこに当たって、や、あ、ああああダメダメダメっ！！博士ッ！これ、き、つい、イっ、いや、イク、イッ、うああっ！あああああっ！！」

「別にイクことも、気持ちよくなることも禁止してないよ。ただ、どれだけ溝口君が気持ちよくなっても、出せはしないけど。まあ沢山イってくれたほうが、リングの耐久度も分かるからありがたいくらいかな」

「〜〜っ！！っ、い、あ、あああああっ！！ああああもうだめ、止めてっ！止めてくださ、あ、あ、っんんん！んんんううううっ！！！」

ガクガクガクっと、勝手に腰が揺れた。その瞬間、おそらく本来であれば、僕は射精に至っていたと思う。でも、やはりせり上がる快感と精液は何か吸い取られて行って、不完全燃焼で終わった。

とはいえ、イク寸前の敏感な身体は維持される。過敏な肉体の中でも、更に感じやすい所を刺激するのに特化したバイブは、僕が混乱する間も動き続けていた。ぐっと前かがみになりたいのに、博士が僕のお腹を押してくるせいで、刺激に耐えることも許されない。

「ふううう...っっ！ううううっ！んあ、や、こんなっ、こんなの無理、
で、ああ、や、あ、博士、博士えっ！」

「まあまあ、そんなに怖がらないでって。どのみち6時間耐えれば終わりになる
んだし」

「っ、さっきは！？さっきの待機時間も実験に入ってるんじゃないんです
か！？」

「何言ってるの？リングを付けてない時間はただの準備だよ？今から6時間に決
まってるじゃない」

「そ、んな...っ！んんううっ！！む、り、無理です、あ、ああ、中、も、お、
さっきからずっと、はひう、ううっ！んんんっ！っ、〜〜〜っああああ！」

「大分焦らしておいたから、良い具合になってるのかな？でも溝口君は、もう震
えるくらいじゃ刺激が足りないよね。せっかくだから、もっと奥まで擦ってほし
くなってない？」

「なっ...！？なに、何を言って...！？」

「ほおら、腰が浮いちゃってるって。もっと落として、なるべく奥まで入れな
よ」

「っ！！！？ふぐううう...っっ！！！？」

しかも、この実験全てで6時間であればまだ救いもあったのに、やはりリングを
装着してから6時間を計測するらしい。そんなのあんまりだ。狂ってしまう、絶
対に耐えられないと、必死に首を振って拒否を示した。それでも、博士に慈悲は
ない。

それどころか、僕がなんとか奥だけは挟られまいと工夫していたのに、その努力を無視して奥へとバイブを入れこもうとしてきた。ぐぐっと腰を下ろそうとする彼に、腕の力で踏ん張って抵抗する。嫌だ、奥だけは絶対にダメだ。そこに入ったらイキっぱなしは免れないし、復帰するために腰を上げるのも難しい。そこだけは死守しなくてはと、どうにか抵抗を見せる。

「う...！溝口君がここまで手ごわいとは...！」

「っ、な、なんでも、アナタの思い通りに行くわけでは、ないですよ...！」

「ふ、ふん！このくらいのことは想定内だもんね！私だって、溝口君が抵抗することくらいは分かっていたんだから！いいもん、君が素直に実験に応じてくれなかった時に使おうと思ってた、とっておきの秘策を使えば問題ないもん！」

けれど僕が激しく抵抗すると、博士は子供じみた地団太を踏んでいた。それでもいい大人かと思うが、大人だから余計な知恵が回る。実際、僕が実験協力をしないことも十分ありえる話だった。それを強引に納得させるところまで、博士は考えていたのだろう。ただし言うことを聞かせるために、何を隠していたのかまでは読めない。なんだ、秘策とはなんだと身を固めていると、博士は自分のポケットから小さなボトルと、薄いゴム手袋を取り出した。

「溝口君は、以前君に使った指サックを覚えているかな？」

「ん、ッ、あの、感度を上げる、棒の時の...？」

「そう。あれね、ちょっと改良して、今度は手袋全体に感度増強の突起を付けたものも作ってみたんだよね」

博士が両手に装着した手袋は、折りたたまれていた時には見えなかったが、細い
織毛のようなものが手のひら側にびっしりとついていて、指のところまでしっか
りとシリコン製の突起が付いているのを見て、口から短い悲鳴が出る。

以前、感度が10倍になる棒の実験に付き合った際、それを作る過程で生まれた指
サックを使用された時があった。確かに彼はその時、いつかは手袋にしたい、と
も言っていた気がする。正直体感として、棒は点で突かれた所の感度が一気にあ
がるが、指サックはまんべんなく感度が上がるし、織毛自体も気持ちいいしでか
なり凶悪な出来栄えになっていた。それが改良されて、面積が広がり、動きの自
由度も上がっている。しかも使用者は志村博士だ。秘策で隠し持っていていいレ
ベルの代物ではないと、僕は椅子の背もたれ側に限界まで身を引く。

「ひっ...！？なんですかそれはっ、嫌です、近づけないでください！」

「嫌です、近づけます。とはいってもこれ、出来たは出来ただけどさ。作りた
てホヤホヤの試作品だから、感度が通常時と比べてどのくらい上がるかも分から
ないし、時間経過で感度が戻るかも検証してないんだよね」

「んなっ、なんてものを使おうとしてるんですか、そんな悪魔の代物しまってく
ださい！」

「溝口君が素直に腰を下ろすならやめてあげるよ」

しかし僕が断固として拒んでいても、博士にとっては暖簾に腕押しだった。聞く
耳がない彼は、同じようにポケットから取り出したジェルを手のひらに出して、
両手に塗り込んでいる。その後確かめるように手を開いたり閉じたりすると、ね

ちゃりと指の間に粘性の糸が引いた。ぬとぬとと光る博士の両手を見て、背筋が凍る。

そんな僕を視界に入れても、特に情がわからない博士は、鼻歌を歌いながら椅子の後ろへと移動した。そして背後に回った彼は、僕の腕の外側から、胸の付近にぬるつく両手を伸ばしてくる。

「ふっふっふ。さあどうする溝口君。このままだとぬるぬるの特製手袋に擦られちゃうよ～？このかわいい乳首が、一生敏感乳首ちゃんになってもいいのかな～？」

「うっ...、表現が余計に気持ち悪い...」

しかも博士の悪い所は、時々変態的表現で僕をドン引きさせてくることだ。なんだ、敏感乳首ちゃんって。気持ち悪い、僕なら思いついても口にはできないぞと、自分の中に生まれたモヤモヤを吐き出さずにはいられなかった。

けれども僕が発言に対して冷たい言葉を投げると、博士は口を閉ざし、身にまとう空気を沈静化させた。なんだ、なんでいきなり黙ったんだと、少し肩をすくめる。だが次の瞬間には、怒気をはらんだ手が、僕の胸全体をにゅるりと擦り上げた。

「はううううっ！！！！？」

「あ～あ。溝口君がひどいこと言うから、乳首が犠牲になっちゃった。もう謝っても許してあげないから。君がバイブを結腸まで入れないと許さないよ」

「んふっ、う、あ、あああっ！！やあっ！こ、これ、手袋だけでも...ッ！！」

「この前よりも、もっと柔らかい突起にしたからね。普通に触られるだけでも気持ちいいでしょ？でも時間が経つと、どんどん感じやすくなっていくから。あんまりモタモタしてたらまずいんじゃないかな〜？」

「あああっ！！あふっ、ッ、っ、ゃあ、だ、め、ダメです、奥は、あそこだけ、はあ...っ！あ、ああ、っ、んんんううう〜〜〜.....っっ！

コリコリ、スリスリと、柔らかいけれど芯のある突起が僕の乳首や胸を擦っていく。右に左に、上下に、あますことなく触れていくせいで、じわじわと胸から感じる刺激が強くなっていく。棒で突かれた時のように、瞬間的に何倍にも感度を上げる効果はないようだけれど、その分数が多いので逃げ場がない。それに、あえて工夫をこらされた手袋は、単体でも十分に感じる出来栄えになっている。なんでそういう開発意欲だけは人一倍強いんだ。しかも最初に被害に合うのが僕ばかりなんておかしいじゃないか。いい加減一般モニターを募集したほうがいい。でもどんなに思考を逸らしたところで、ぬめる指先が現実引き戻してくる。耐えれば耐えるほど、状況が悪くなるなんて拷問に等しい。それでも、奥まった場所にバイブが入り込むのだけはと、ギリギリのところで耐えていたのに。

敏感に育まれた乳首を、博士の人差し指と親指が、きゅっと摘まんできた。そのまますりすり優しく擦られた瞬間、思わずがくんと力が抜けてしまう。元より切羽詰まった状態で耐えていたせいで、緩んだらあっという間だ。まずいと思った時には、先端のカリのところまで入り込んでしまった。

「うは...ッッ！！？あ、あゝ ああああうゝ うゝ ううううううっ！！！」

「あ、奥まで入った？なんだ、思ったより物わかりがいいじゃない！そうだよね、耐える程きつくなることくらい、溝口君なら分かって当然か。うんうん、本当は協力したいけど、素直になれなかったただけだよ。私は分かってるよ。良い子良い子、溝口君はとっても良い子だねえ」

「んいっ！？ひう、うううっ！？ゃあっ！あ、あああああああっっ！！」

ぐっぷりとハマってしまえば、そこから腰を浮かせるのは容易ではなかった。思った通り、すぐにイッて、そこから戻ってこれなくなる。頭がバチバチと何度も破裂しかけた。けれど射精に至るはずの分は、リングに吸収されていく。おかげでイク手前のまま、一生待機しているような状態が出来上がった。ある意味、究極の寸止め状態だ。

しかも博士ときたら、悪ふざけなのか、真面目なのか、乳首を弄る手を止めてこない。なんで快感を上塗りしてくる？僕は言われた通り腰を落としたんだがと、可動域限界まで上半身をねじって、手袋から逃げようとした。けれど胸から逃げてもわき腹を撫でられるし、お腹もジェルをかけられてはぬるぬるにされるし、そっちも嫌だと暴れると、乳首を抓られる。その刺激でイッては、絶頂を吸収される。一体この短時間で、僕は何回分の絶頂を迎えてしまったんだろう。それら全てがいつかは返ってくるのだと思うと怖い。だから我慢した方がいいのに、あらゆるところから強い快感が襲ってきて、どうあがいてもイキっぱなしを強いられてしまう。

「んんんんっ！！！！ひっ、ひいいいっ！うああっ！も、やめ、やめで、え、
あ、あああううっ！！ッ、イッ、イッて、こんなイッたら、あ、ああ、あゝ～
～～ッッ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー